

『長崎市史』風俗編を論評する人々

藤本健太郎

『長崎市史』は大正七年(一九一八)、長崎市会での建議案の提出を受けて、同八年から編纂が開始されました。編修担当には古賀十二郎、永山時英、福田忠昭など、当時の長崎学研究の第一人者が任ぜられ、昭和十三年までに地誌編、風俗編など全八巻が刊行されました。とりわけ古賀十二郎の編修による『長崎市史』風俗編は、情感あふれる文章表現と忠実な文献史料の引用から当時の文芸誌上において、三大名著の一つとして高い評価を受けました。現在でも『長崎市史』は自治体史の白眉として、歴史学研究上にその名を留めています。

本稿は『長崎市史』風俗編が、どのように受け止められ、読んだ人々に感想を持たれたのか、当時の学術・文芸雑誌が『長崎市史』風俗編について感想を述べた、書評三本を紹介することで『長崎市史』風俗編の魅力を感じていただきたいと思います。



『長崎市史』風俗編

一つ目は、大正十五年二月に発行された政治言論雑誌『日本及日本人』の記事です。これは『長崎市史』風俗編の書評として、確認できる中では最も古いものです。引用部分の他にも『長崎市史』の出版では、長崎市の市史編纂事業を「うれしいこと」と述べています。

三つ目は、明治大正期にかけて活躍した文芸評論家の内田魯庵による書評です。『中央公論』大正十五年十月号に掲載されています。内田魯庵は、『ドストエフスキー』『罪と罰』など外国語小説の翻訳家としての活動に加え、『トルストイ』『イワンのぼか』といった、著名な小説をいち早く世に紹介するなど、文芸評論の第一線で活躍した人でした。書評の中で魯庵は『長崎市史』風俗編のことを、日本三大名著となるべき素晴らしい出来であると絶賛しています。

また、晩年の古賀と交流があった永島正一によると、内田魯庵からの書評を古賀は終生誇りにしていたといっています。

三、『長崎市史風俗編』は(中略)近時の大著である。近年、各市・各地方・各庁は競って地方史を編纂し、従来閑却された民族及び一般文化にも渉って相当精細なる討査を尽くして詳述されているが、私の知れる限りでは此の『長崎市史風俗編』ぐらい、周治博綜(しゅうちひろそう)極めていい(中略)本書中の最も興味に富み、且最も読みごたえのあるものは踏絵と衣食住と遊女との三章である。(※)広くすべてを修めること

こうして『長崎市史』風俗編は、同時代の人々から極めて高い評価が与えられていったのです。

評価を受けた古賀は、親交の深かった渡辺庫輔にあて「風俗編は案外と好評価のようです。いよいよ増補版の『長崎市史』風俗編の出版などしたいと考えています」と手紙を送り、高揚した気持ちを綴っています。

この後、古賀は『長崎市史』風俗編の増補版の著述というものを視野に入れて、研究活動に弾みをつけて長崎の歴史・文化研究に注力していったのです。そして昭和二年、『丸山遊女と唐紅毛人』と題した原稿の執筆にとりかかり、昭和十年三月に脱稿しています。『長崎市史』風俗編の増補版として『丸山遊女と唐紅毛人』が著述され、古賀十二郎の長崎学研究が進展していったのです。

平成三十年は『長崎市史』の編纂が建議されてから、ちょうど百年目にあたります。『長崎市史』風俗編を読んで、先人たちが形作った長崎学に思いを馳せてみてはいかがでしょうか。

(長崎市長崎学研究所学芸員)

一、此度の長崎市史は古賀氏がいるからこそ出来るのだ(中略)長崎市は古賀氏を用ひて、数万円の費を抛ち、此度愈々十数冊に互る市史出版を企てて、昨年第一巻仏寺篇を出し、此度又第二巻の風俗篇を出した。実に堂々たるものだ。自分は仏寺篇は知らぬが、風俗篇には實際驚倒せしめられたといつて好い。その内容の優れたる恐らく日本風俗誌の中でも空前絶後のものであらう。

二つ目は、第二次世界大戦前における学校教員を会員とする教職員団体の「帝国教育会」が刊行していた『帝国教育』という機関誌に掲載してある文章です。大正十五年十月発行の第五三〇号に掲載された「長崎市史」の「風俗篇」に就きて」という記事は『長崎市史』について、「優れて居る」とする理由を、古賀十二郎という人材を得たことと論じています。とりわけ『長崎市史』風俗編のうち、丸山遊女と芸妓に関する項目について、その内容を評価しています。

二、長崎関係の文献といふものは他の地方研究資料に比して非常に多い。異彩に富んだ趣味の豊かな記録もかなりある(中略)長崎市が市史を編纂するに当たつて、古賀氏を其の主任に挙げたのは、適所に適材を得たものである。かくの如き篤志な郷土誌の研究者をもつて居た長崎市は幸福であつた。長崎市史の優れて居る所以は、ただ長崎市が特殊な土地であるといふのみではない。編纂者に其の人を得たといふこともあつて力あるものだ(中略)此の書物ほど丸山遊女や芸妓のことを詳しく包括的に書いたものは、今までに嘗て見たことがない。

風信

○恒例の長崎日ボ協会と共催し、長崎史跡見学会を十一月一日(木)にいたしました。コースは長崎開港当時(一五七〇年頃)長崎の領主長崎氏の屋敷があつたとされる櫻馬場地区を散策、参加者も多く盛会でした。

○「文化の日」といえば、『宮内庁正倉院事務所』にて、年に一度だけ奈良国立博物館を会場に正倉院の所蔵品の一般展示会が開催され、其の内覧会の「ご案内」状を今年も戴きました。同展示会は「天平勝宝八(七三六)年 光明皇太后が奈良東大寺大佛に献上された珍宝万余に及ぶ宝物の中より毎年百件近くを選び年に一度期間を定め展示す……」今年は十月二十六日(金)午後一時より内覧会 二十七日より十一月十二日(月)まで会期中無休(午前十時より午後四時まで)、会場は奈良国立博物館東・西新館(今年第七十回で毎回奈良国立博物館より「展示図録」が発刊されており、大いに参考となりました)。

○長崎商工会議所より来年度開催の第十四回長崎歴史文化長崎検定試験を開催するので其の「打合せ会議」に出席下さいとの事。試験会場は例年のように長崎と東京で日時は来年二月三日(日)。申し込みは十一月二十六日より来年一月十一日まで、毎回三〇〇人以上の申し込みがある由。合格率は三級七十一%だが一級は六・三%との事。長崎の観光検定試験は東京、京都に並び全国的に有名である。

○十八銀行城山地区主催の第九十五回勉強会を十月二十三日(火)開催。今回は「長崎丸山ばなし」をして下さいとの事。江戸時代、長崎の丸山は「京都の島原、お江戸の吉原、長崎の丸山」とうたわれるほど有名な処でした。そして当時の名勝案内に「長崎に丸山という処なかりせば 上方の金銀 無事にこそ帰らん」と言われた程でした。丸山の遊里が廃止されたのは昭和三十三年三月三十一日でした。

○今回ご寄贈いただいた書籍

一、長崎県文化振興課主事の橋本正信氏、長崎学アドバイザー本馬貞夫氏来訪。両氏編纂「国境の島・杵岐・対馬・五島 交易・交流と緊張の歴史」を戴きました。内容は倭寇の真実、白村江の合戦、遣唐使船の航路、元寇等、国境にある長崎県の特種なる歴史の歩み興味深く拝読させて頂きました。一、土肥原弘久氏より自著の「新聞が伝えた諏訪神事(長崎くんち)」を戴きました。明治二十年十月十日の長崎日報に始まり、昭和二十二年十月の長崎民友新聞社編輯に至る各社の「おくんち記録集」で大いに参考になりました。

長崎歴史文化協会 研究室

TEL 八二一 一五四〇

十八銀行旧公会堂前出張所 二F

